

援助依存からの脱却を目指すアフリカからの声

開発経済調査部 主任研究員 福田 幸正

昨年1月、出版と同時にアフリカ援助をめぐる一冊の本が大きな話題を呼んだ。タイトルは“Dead Aid”（副題：why aid is not working and how there is another way for Africa 出版社 Allen Lane 2009）と非常に刺激的なもの。貧困にあえぐアフリカ諸国には援助が必要だというのが世界の常識であり、貧困削減のためアフリカへの援助を一層強化すべきだ、というのが世界の潮流であるにもかかわらず、この本の筆者は「援助こそがアフリカの開発の足かせとなっている」と援助のあり方そのものに真っ向から歯切れよく異議を唱えている。また、これまでアフリカ援助の論客といえば白人男性と相場が決まっていたが、筆者はアフリカ（ザンビア）出身のインテリ、しかも魅力的な女性であるということも注目を集める理由となった。

著者は Dambisa Moyo。彼女は南部アフリカのザンビア生まれ。Oxford 大学(PhD 経済学)、Harvard 大学ケネディースクール (MPA)、American 大学(MBA、化学 BSc)などで学業を修め、世界銀行コンサルタント、Goldman Sachs エコノミストとしての職歴を経ている。現在スウェーデンの石油会社 Lundin Petroleum や南アフリカのビール醸造会社 SABMiller の役員を務める傍ら、途上国の子供達のための慈善活動にも関わっている。

“Dead Aid” は発表間もなく New York Times 誌のベストセラーとなり、2009年5月には Moyo は TIME Magazine 誌の「最も世界に影響を与えた 100 人」に選ばれている。また、2009年の World Economic Forum では Young Global Leaders の一人に選ばれ、世界各地で数多くのインタビュー、セミナーに応じている。一時期ほど騒がれなくなったようだが、“Dead Aid” の発表から 1 年以上が経っているにもかかわらず、最近では Foreign Affairs 誌の 1・2 月号（英語版）で著名な経済学者ジャグディーシュ・バグワティヤーがコメンタリーを寄せている(“Banned Aid”)。このようなことから、狭い援助の世界の中だけでなく広範な反響があったことがうかがえる。

前置きが長くなったが、“Dead Aid” や講演の中から Moyo の主張をまとめると次の通りである。

- アフリカの経済成長、貧困削減を主導するのはあくまでもアフリカ諸国の政府であり、西欧先進諸国ではない。ましてやアフリカ貧困撲滅運動に熱心なロックスターの Bono のようなセレブでもない。
- 援助が IS（投資、貯蓄）ギャップを埋め、成長をもたらすというロジックはアフリカでは破綻している。（過去 60 年間にアフリカには 1 兆ドル以上の援助が投入されたが、結局成長をもたらすことはなかった。）

- 先進国側の高失業率、財政難、低成長を考えると、アフリカは永続的に援助に依存するわけにはいかない。援助に依存して長期的成長を実現した国は未だかつて存在しない。先進国とアフリカ諸国は、アフリカの援助依存体質からの脱却、出口戦略について真剣な議論を行うべき。
- これまでドナー側は様々な開発援助戦略をアフリカで試みてきたが、その結果、アフリカ諸国の政府は機能障害に陥った。(数少ない例外が南アフリカとボツワナである。)

<主な援助の弊害>

- 政府の国民に対する公共サービス提供責任の放棄
- 徴税努力の放棄
- 政府の腐敗体質を助長
- インフレの悪化
- 債務累積
- 輸出部門の衰退
- 企業家精神の圧殺
- 国民の帰属意識の希薄化
- 社会不安誘発

(結局、政府は国民に対してではなくドナー側に説明責任を果たすことに多くの時間を割くことになる)

- なぜ、先進国はアフリカに援助を与え続けるのか。それは、アフリカの成長を鼻から信じていないからだ。
- 中国は援助に頼らず、貿易と FDI、資本市場の活用によって貧困国から脱却することに成功した。アフリカが資本市場から疎外されているのなら、中国や中東の資金をタップすべき。なお、中国はアフリカのインフラ整備に多大の貢献をしている。
- それでも国際社会から支援を求めるべき分野
 - 貿易：市場開放
 - 金融：マイクロファイナスの活用
 - 企業家育成支援
- アフリカに情けや憐れみはいらない。一人前の扱いと機会を切望する。

実は内容的には Moyo の議論はさほど目新しいものではない。また、援助の停止が新たな資金源を見出すことにつながり、自ずとアフリカ諸国の政府のガバナンス向上に結びつくという主張は楽観的に過ぎるとの指摘もある。しかし、それはそれとしてアフリカ人自身が自分の言葉で世界を相手に毅然と主張したこと自体が重要なのだ。ところが、このように世界が注目した“Dead Aid”と Moyo ではあるが、どういうわけかこれまでのところ日本では開発の専門家がまともに取り扱った形跡がない。Moyo の議論は援助に携わる者にとっては耳の痛い内容かもしれないが、このような途上国側からの切実な声に感応しないのであれば、世界の潮流と日本の間の知的ギャップが広がらないか心配だ。

Moyo のエッセーや講演の画像などを見て感じることだが、この一年間、彼女の発言内容にはぶれがない。奇を衒わず、毒舌をふるうこともなく、途上国のインテリにありがちな屈折したプライドとも無縁である。意地悪な質問に対しても、動じることなく笑みを絶やさず穏やかに淡々と応じている。それでいて極めて厳しい主張を突き付けてく

る。ついにアフリカに真の憂国の士現わる、といったところだろうか。彼女の議論が気に食わず、揚げ足を取ろうとする輩は多い（Moyo 非難のキャンペーンを張っている NGO さえ存在する）が、多くのアフリカの人々、それも多くの若者が Moyo に触発されたはずだ。また、アフリカ以外の途上国の人々にも少なからず希望を与えたことだろう。今後大勢の Moyo が現れてくることを期待したい。

昨今、援助を巡る議論は過度に複雑さを増しているように感じられるが、究極的には援助が必要とされない世界が志向されるべきこと、また、国づくりの主体はあくまでも途上国の国民自身であるということ、そして外部からの支援には自ずと限界があるということに尽きる。これらの原点を、“Dead Aid” は援助する側と援助を受ける側の双方に再確認したものと受け止めるべきであろう。それはアフリカだけではなく、今後日本が 5 年間で 50 億ドル相当の ODA 投入を決定したアフガニスタン支援にも言えることである。

以 上

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様自身でご判断下さいますよう、宜しく願い申し上げます。当資料は信頼できるとされる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。

Copyright 2010 Institute for International Monetary Affairs (財団法人 国際通貨研究所)

All rights reserved. Except for brief quotations embodied in articles and reviews, no part of this publication may be reproduced in any form or by any means, including photocopy, without permission from the Institute for International Monetary Affairs.

Address: 3-2, Nihombashi Hongokuchō 1-Chōme, Chūō-ku, Tokyo 103-0021, Japan

Telephone: 81-3-3245-6934, Facsimile: 81-3-3231-5422

〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町 1-3-2

電話：03-3245-6934（代）ファックス：03-3231-5422

e-mail: admin@iima.or.jp

URL: <http://www.iima.or.jp>